

対象：市町村教育委員会関係者
及び中学校英語科先生向け

TOEFL Primary[®]のテスト結果を どの様に指導改善に活かすのか ーよりよい英語指導・英語授業のための視点ー

京都教育大学附属京都小中学校 英語科主任
ETS公認TOEFL Primary[®] / TOEFL Junior[®]トレーナー
メタメトリックス公認レクサイルエデュケーター
一般社団法人国際教育英語試験協会アドバイザー
今西 竜也

目次

- | | |
|--|-----|
| 1. はじめに(指導要領と関わって) | p.1 |
| 2. TOEFL Primary [®] のテストとテスト結果からの
指導改善と活用 | p.4 |
| 3. おわりに | p.9 |

1. はじめに(指導要領と関わって)

中学校に入学してくる生徒は、5・6年生で検定教科書を使い、様々な表現を学習しています。助動詞 can や過去形、現在進行形など中学校で教えているかなりの数の言語材料を学習していて、しかも学習している語彙は発信語彙と受容語彙を合わせて600語～700語にもなります。

小学校と中学校とでの英語の指導の違いの一つは、中学校での英語学習は文法を基本として進められており、対して小学校では場面を基本とした学習であるということです。中学校の教科書ではそれぞれの単元に基本となる言語材料が設定されていますが、小学校では買い物をしたり先生紹介をしたりするほか、道案内や宝探し、思い出を語る活動など、特に日常的に現実で起こりうる場面が多く設定され、バラエティに富んだ場面を経験してきています。

中学校では、育成を目指す資質・能力の三つの柱として「知識・技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性」を示されていて、その目標の中で、小学校では慣れ親しみとして設定されていた「読むこと」「話すこと」を高次化し4技能の統合的な育成に言及しています。また、目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、簡単な情報や考えなどを理解する力にも言及しています。場面を設定して伝え、その中でどのような内容を、どんな言語材料を使って表現するのかという点においては、小学校での場面を設定した学ぶスタイルと似ていると考えられます。

「目標」と「内容」においては、より現実世界とのつながりが強調されていると言えます。「聞くこと」「読むこと」の目標においては、以下のとおりです。

「聞くこと」

- (ア) はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。
- (イ) はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができるようにする。
- (ウ) はっきりと話されれば、社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができるようにする。

「読むこと」

- (ア) 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれたものから必要な情報を読み取ることができるようにする。
- (イ) 日常的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の概要を捉えることができるようにする。
- (ウ) 社会的な話題について、簡単な語句や文で書かれた短い文章の要点を捉えることができるようにする。

また「言語活動及び言語の働きに関する事項」における「聞くこと」「話すこと」で示されている内容は以下の通りです。

「聞くこと」

- (ア) 日常的な話題について、自然な口調で話される英語を聞いて、話し手の意向を正確に把握する活動。
- (イ) 店や公共交通機関などで用いられる簡単なアナウンスなどから、自分が必要とする情報を聞き取る活動。
- (ウ) 友達からの招待など、身近な事柄に関する簡単なメッセージを聞いて、その内容を把握し、適切に応答する活動。
- (エ) 友達や家族、学校生活などの日常的な話題や社会的な話題に関する会話や説明などを聞いて、概要や要点を把握する活動。店や公共交通機関などで用いられる簡単なアナウンスなどから、自分が必要とする情報を聞き取る活動。

「読むこと」

- (ア) 書かれた内容や文章の構成を考えながら黙読したり、その内容を表現するよう音読したりする内容。
- (イ) 日常的な話題について、簡単な表現が用いられている広告やパンフレット、予定表、手紙、電子メール、短い文章などから、自分が必要とする情報を読み取る活動。
- (ウ) 簡単な語句や文で書かれた日常的な話題に関する短い説明やエッセイ、物語などを読んで概要を把握する活動。
- (エ) 簡単な語句や文で書かれた社会的な話題に関する説明などを読んで、イラストや写真、図表なども参考にしながら、要点を把握する活動。

上記の目標や言語活動と、TOEFL Primary®の問題例を見比べると、TOEFL Primary®が大部分において指導要領の求めることに対応していることが見て取れます。

心配されることの一つとして、語彙の視点がありますが、学校で学習する語彙とTOEFL®のテストに登場する語彙の違いや量については、公式問題集を参考に調査した結果を以下に示します。公式問題集の1回分の試験問題を取り上げて分析したところ正答に至るために有効な情報となる語彙は、リーディングパートとリスニングパート合わせて

379語でした。これらには、elephant, school, treeなどの名詞や、cook, find, playなどの動詞、happy, long, newなどの形容詞、in, on, underなどの前置詞が含まれます。小学校3・4年で用いられているLet's Try 1と2について、指導書から指導すべき語彙と指導者が指導において発する表現に含まれる語に154語が含まれています。つまり小学校4年が終わるまでにTOEFL Primary®で出題される40.6%は、今までに出会ったことのある語です。さらに5・6年で使われる検定教科書6社のうち、東京書籍のNew Horizon

Elementary 5 及び 6 と、三省堂の CROWN Jr. 5 及び 6 で扱われる語を調べてみました。Let's Try で学習した数を合わせると、東京書籍においては 216 語(57.0%)、三省堂においては 222 語(58.6%)でした。中学校でも検定教科書 6 種類から東京書籍の New Horizon と三省堂の New Crown の 3 年間で学習する語を見ると、東京書籍においては 310 語(81.8%)、

三省堂においては 338 語(89.2%)でした。つまり中学校の始まりにおいては、テストの全体の 60% 近くが理解可能な語であり、その後徐々にわかる語が増え、中学校の英語の学習を終えるころには 80%~90% の語を理解してテストに解答することとなります。詳しくは表 1 の通りです。

表 1 1 回分の TOEFL Primary® に含まれる語のうち各教科書で学習する語の数と割合

3・4 年	5・6 年		中学校	
文部科学省	東京書籍	三省堂	東京書籍	三省堂
Let's Try	New Horizon Elementary	CROWN Jr.	New Horizon	New Crown
154	216	222	310	338
40.6%	57.0%	58.6%	81.8%	89.2%

※ただし、それぞれの語の数には、それまでの教科書で学習した語を含む

事前にテストの準備ができないという側面があることにも大きな期待を寄せることができます。日本の学校においては古くから、授業で扱った内容だけをテストで問い、記憶力や要領の良さが測られるようなテストが多くありました。しかし現在、学習指導要領の目標とするところは「何ができるようになった

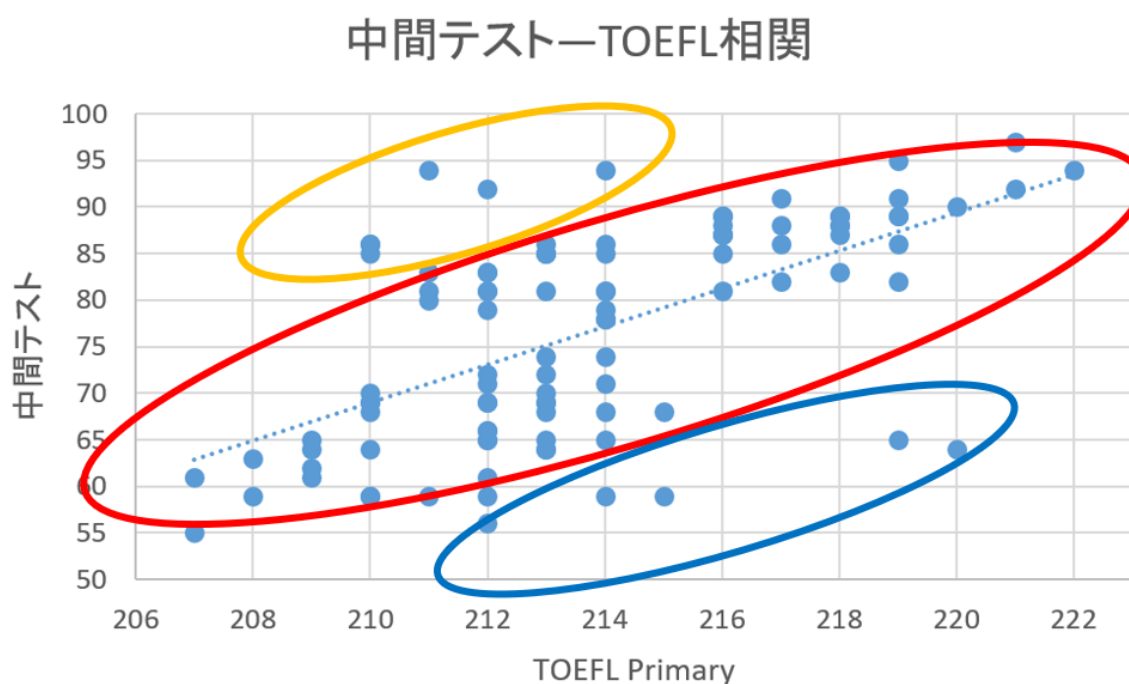
のか」です。過去の問題の演習や教員による予想問題とその指導においては、問題を解くスキルばかりが身に付き、真に必要な英語を使って何かを成し遂げるスキルにはつながりにくいと考えられます。TOEFL Primary® の実践を通して、指導者が指導の実際を振り返り、授業を改善することに大きく期待できます。

2. TOEFL Primary®のテストとテスト結果からの指導改善と活用

①校内定期テストーTOEFL®スコア相関図から学習者への示唆

校内テストの問題の質にも影響されますが、テストの内容が知識・技能に偏りがある場合、

英語運用能力との相関を見ることができます。下に中間テストとTOEFL®のスコアとの相関を例示します。



赤線で囲まれた位置にいる学習者は、知識・技能と英語の運用能力がバランスよく身につけていると考えられます。どちらかに偏りがあるのではなく、英語の知識・技能をしっかりと使えるようになりながら、英語の運用能力を身に着けていると考えられます。

オレンジの線で囲まれた位置にいる学習者は英語の運用能力よりも知識・技能に偏りがあります。知識・技能ばかりが身につけて、それらを使いこなせていません。単語を覚えたり文法を理解するばかりでなく、実際に使われる場面を想定して4技能5領域において使う練習をしなくてはなりません。しかし逆を返せば、十分知識・技能があるので、使う練習をすれば、分布が右側に移動し、

英語を使用してコミュニケーションをとれるようになることが期待できます。

青線で囲まれた位置にいる学習者は、英語の運用能力は高いものの知識・技能が追いついていません。幼少期から英会話に通っている生徒や帰国子女等に見られがちです。つまり英語でのコミュニケーションはできるものの、正確に欠けるという傾向です。しかしながら、英語の知識・技能に焦点を当てて学習すれば分布は上方向に移動し、今までよりもっと深く広く表現する力が発揮されていくものと思われます。

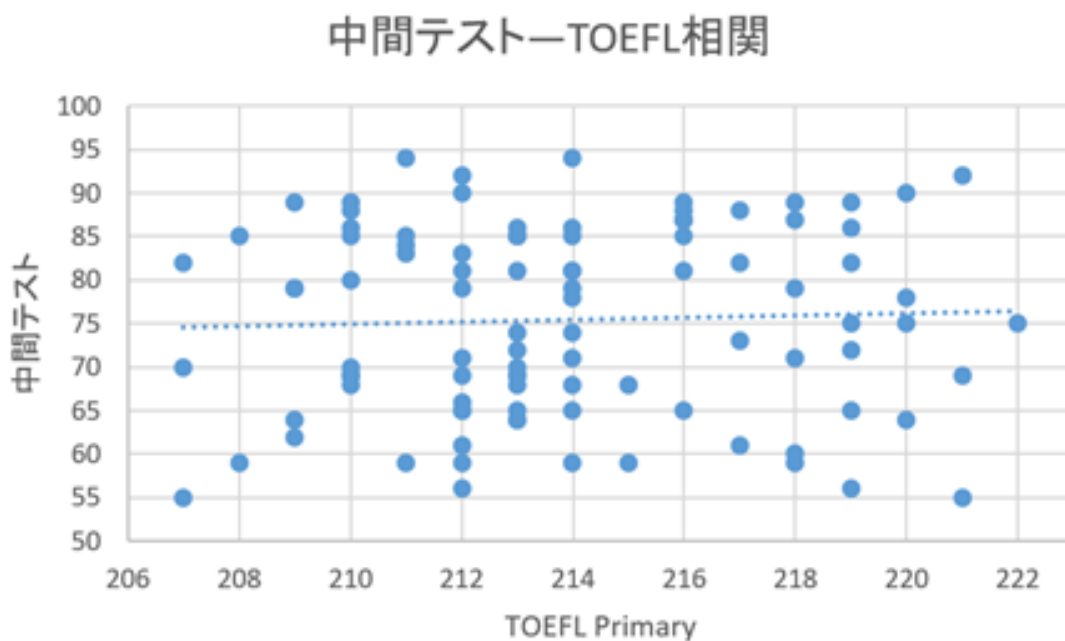
②校内定期テストーTOEFL®スコア相関図から指導者への示唆

指導する児童・生徒の集団のスコアを前年や上の学年の同時期のスコアを比較することによって、全体の把握はある程度できますが、上記の相関図を使って、指導者のテストニングと指導のあり方への振り返りをします。

②ー1 テストは適切か

学校で教科書を使って指導しテストを行う場合、テストで測られる力が「知識・技能」に偏ってしまう場合があります。そのような

テストでは文法操作の要領がよい学習者や暗記することが得意な学習者ばかりが高得点を得てしまい、本当の意味での英語の力を測っていないことになってしまいます。相関図で見ると、右の図のように、近似曲線に関係なく学習者が分布している場合には、校内のテストと英語の運用能力の相関がなく、本当の英語の力が測れていないと考えられます。前回までのテストでの相関図と比較するなどして、テストの内容を十分に振り返り検討する必要があると思われます。



②ー2 指導は適切か

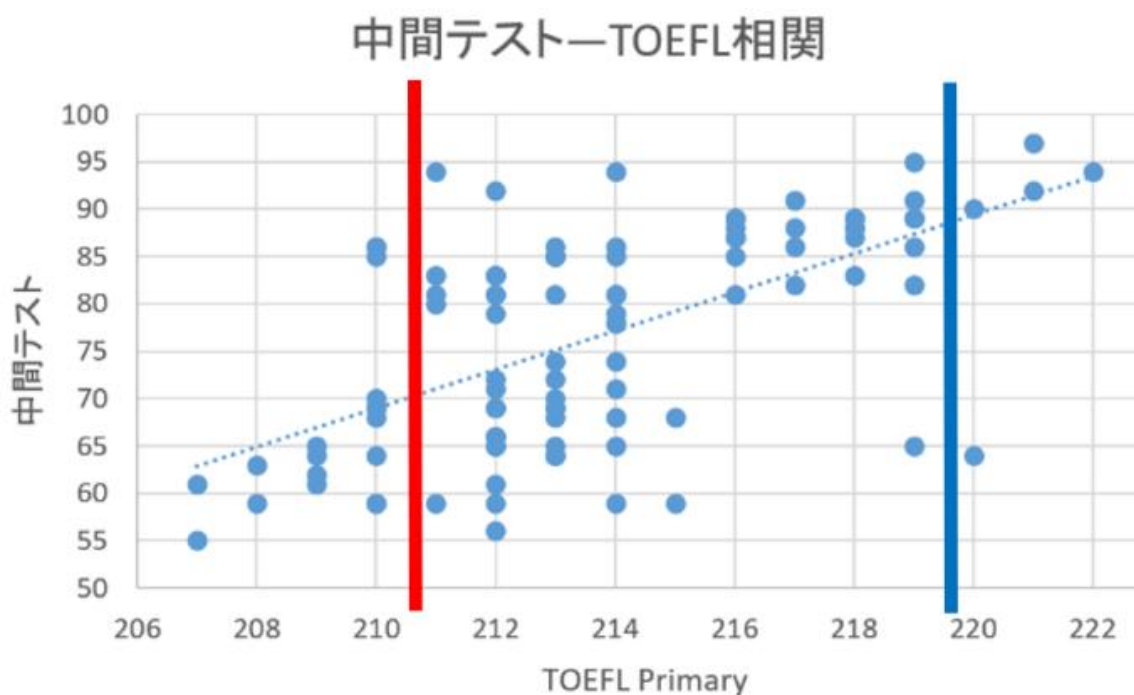
テストの質も検討されるべきですが、上のような分布になっている場合には、指導のあり方も検討したいものです。知識の教え込みになり、実際に使える力が身についていないかもしれません。語彙や表現を指導する際に

は、生徒がそれらを使用する場面を理解し、4技能5領域のすべてにおいてそれらの語彙・表現を使えるように学習させる必要があると考えられます。各学年や各教員の指導した児童・生徒の分布と見比べながらよりよい指導を模索します。

②－ 3 指導の目標設定

指導する教員の目標としても使用できます。右の図の青赤のラインのように、英語を得意とする生徒にはこのラインを越えさせたい、苦手な生徒でもここのラインは超えさせたいという目標のラインを引き、どの生徒にどの

ような指導や教材の提供、アドバイスが必要なのかを検討することができます。例えば、校内テストで上位の生徒であれば運用能力を付けること、校内テストで下位の生徒は知識も運用能力も必要です。



③スコア別の学習・指導例

TOEFL Primary®はテストの結果がスケールスコアとして出てきます。このスコアはCEFRとも対応しているほか、それぞれのスコアごとに、次のステップを目指すためのア

ドバイスが設定されています。資料「TOEFL Primary® Step 1 / Step 2 学習・指導例」を参考にすると、例えばリーディングが104点でCEFRのA1中間層の受験者には以下のようなアドバイスや指導等が示されています。

「標準的な生徒へのアドバイス」

- なじみのある人、もの、情報について書かれている長い文章や物語を読みましょう。
- ものや場所、人、動作、思考を表す単語をたくさん学びましょう。
- まとまった文章や情報、物語を読み、その内容を自分のことばで話したり書いたりしてみましょう。

「学習について」

☆英語の文章にどんどん慣れていく必要があります。

- たくさん読めるように、自分の好きなジャンルで本を選びましょう。イラストや写真が多く、読んでいるときに止まってしまうくらいレベルを選ぶとよいでしょう。LEXILE 200Lくらいまでの本が読みやすいでしょう。
- セリフの部分では、だれが言っているのか、どういう気持ちで言っているのかを想像しましょう。
- グラフィックノベルズ(GN)も時々読んで、登場人物がどんな表情やジェスチャーをしているのかを参考に内容を理解しましょう。

「指導の例」

時系列や場面、登場人物の性格や人間関係について、質問し答えさせる

クラスや個別で洋書や文章を読んだ後、話の重要な場面を表したピクチャーカードを示し、並べ替えさせて時系列を確認させます。また登場人物について、どのような性格や役どころだったのか、登場人物同士の人間関係なども問い、黒板に書きだしたりワークシートに記入させたりすることによって、より深く読み込むことにつながると考えられます。読んだ本について簡単な感想とともに記録させることもよいでしょう。

レシピや人物の説明の文章をシンプルな表現にリライトして読ませて内容を理解させる

料理の作り方や人物の紹介、有名で児童・生徒が既に知っているような物語を平易な英語にリライトして読ませます。読んで意味が分からない部分があっても写真やイラスト、既知の情報などとリンクさせて内容を理解していく読み方を定着させるとよいでしょう。

知らない語でも読み方を想像できるようにフォニックスの指導をする

読めない語に遭遇すると、あきらめてしまう児童・生徒は多いようですが、読めない語であっても音で聞くとわかる場合もよくあります。フォニックスを使って音が分かるようになると、読める語が増えますので、フォニックスを指導して6～10字程度の語を読めるように練習していくと、粘り強く読み進めていく力がつくでしょう。

上記のようなアドバイスや指導を個々の生徒が受けることによって個別に最適な学習の方法を指導者が提示できます。また各教室における学習者の実態を把握することで、授業において焦点化するポイントや、次のステップのために学習者が受けるべき指導や行うべき活動の姿がよりはっきりと見えてくると思われます。

④TOEFL®のテスト問題からの示唆

④－１ティーチャートーク・クラスルームイングリッシュ改善への期待

TOEFL®のリスニング問題を確認すると、話すスピードが速いことや口語表現でよく用いられる表現が多いことなどがわかります。問題に登場するような教室内で先生の指示を聞く場面や、公園や家の中で友だちと対話する場面など、英語を使う実際の場面においては当然のことです。授業において指導者が用いる英語のスピードが遅かったり、学習する言語材料にばかり焦点を当てて、その話題や場面における自然な表現を十分効果的に用いていなかったりすることに気づくことがあるかもしれません。TOEFL®のリスニングをイメージすれば、平常から自然な英語のスピードで話すことの大切さや対話において自然に用いられる表現を授業内で多く聞かせていくことの必要性が感じられるはずです。指導者が自身の話す英語をTOEFL®のリスニングの英語と比較することにより、より実践に役立つ表現になっていくことが期待できます。

④－２指導目標への期待

TOEFL®の問題を分析すると、小学校や中学校の授業で扱った表現や言語材料がよく出

てきていることに気づきます。しかし実際に受験者の中には、正解を選ぶことができない受験者もいます。授業での指導において、どこまでできるようになるのかという目標が建てられていると思いますが、教科書や問題集の内容を目標にしているだけでは、使える英語には届きません。インプットから十分にインテイクまでもっていくために、どのような場面を設定して、どこまで使えるようになるのかをイメージして授業や単元の目標を設定を高度化していくことが求められます。またTOEFL®におけるそれぞれの表現は、もちろん自然な文脈の中で用いられ、内容を読んだり聞いたりしながら状況を把握して問題を解くようになっています。普段の授業でも言語材料を切り出して学ぶのではなく、自然な文脈の中でも使っていくという授業に変わっていくことを期待します。

⑤Can-Doリストの活用と改善

各学校で作られているCan-Doリストが、作りっぱなしになっているということはないでしょうか。TOEFL Primary®にはそれぞれのスコアにおいて、アドバイスが示されていますが、学校のCan-Doリストと比較検討することによって、それぞれの学校や学年がどのようなことを目指していくべきなのかをより具体的に把握することができます。また学習者の実態や用いる教科書、TOEFL®の結果などを踏まえて、各学校のCan-Doリストを再確認して指導につなげたり、より学習者に寄り添う内容へと改善していくことが期待されます。各学校のCan-Doリストが作りっぱなしにならないようにTOEFL®と合わせて活用していけると思われます。

⑥洋書の利用

洋書多読の取り組みをしておられる先生方もおられるかもしれませんが、TOEFL®のスコアレポートに記されている読解力を表すLEXILE®指数を用いてより適切な本を選択することができます。また指導者が学習者の読解力の実態を知ることによって、授業におい

てよりオーセンティックな教材や資料を用いるヒントになります。ちょっとした絵本や短いお話を用いることによって、英語話者が実際に触れている本物と出会うことによって、英語を学習するモチベーションの一つにつながると考えられます。

3. おわりに

TOEFL®のテストの一番の特徴は「本物であること」です。一生懸命に英語を勉強しても、実際の場面で通じなければがっかりしてしまいます。教科書や問題集を終えるだけでは、実際の場面に活用される英語の力になっていないとは限りません。教科書を扱う授業者が、実際の場面をイメージしながら目標をもって指導に当たることで、生徒の英語の質はよりよくなることは言うまでもありません。

そのためには実際場面における表現の用いられ方やスピード、語彙の選択など多岐にわたるポイントを押さえていかなければなりません。英語が母語として話されている場所で作られたテストの中にその多くが含まれています。使い方によって、学習者のためでもあり、指導者のためでもあるTOEFL®がよりよく活用されることを願います。

今西 竜也

所 属: 京都教育大学附属京都小中学校 英語科主任

学 歴: 京都教育大学大学院教育学研究科修了

在 籍: 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程、英語教育の研究

編集協力: 三省堂 クラウンジュニア

資 格: ETS公認TOEFL Primary® /TOEFL Junior®トレーナー

メタメトリックス公認レクサイルエデュケーター

